



國家圖書館編

東亞同文書院 中國調查手稿叢刊

19

國家圖書館出版社

六月四日

六月二日

國家圖書館
編

東亞同文書院
中國調查手稿叢刊

19

第一九冊目錄

昭和四年（一九二九）旅行日誌（第二十六期生）

大久保英久	第二十一卷		一
寺崎修三	第二十二卷		六五
永島良一	第二十三卷		一四九
藤原昇	第二十四卷		二〇七
山本米雄	第二十五卷		二五三
福滿篤	第二十六卷		三一七
三宅勳	第二十七卷		三五三
岩橋竹二	第二十八卷		四二七
長友利雄	第二十九卷		四七三
栗林鐵男	第三十卷		五四一

昭和四年度

調査旅行日誌

第貳拾六期生

大久保英久

自序

自分は絶えず静かき世界——灰色の地の窪みに生れた、
水溜の如き世界を懐く寂しき嘆願者である。世の如何
ある物音も遠いものの如く、その水は、虚心に澄んでゐる。
このもの静かき世界は余りに淋しかった。しかし、そこに人生
を以て、静かに物と思はせる境地があった。斯うして、静
かき世界を追ひて運命の子は、その思索低迷を江南の
はな舎に求めた。

大陸の雲を仰ぎ、草に埋もれ、静かに寂寥の世界に
冥想した我々の魂の成長と進展とは、決して安閑な
知の堆積ではなかつた。其処には無限の尊いサビシクが
あった。

自分は、静かに歩み来りし江南のスクール・ライフを回顧

——みる。——そこにはいくつもの過程があった。しかし、我々の心に、白銀の懐き胸のとさめきと、燃上る火にも似た元奮を甦らせようは、老大国の旅の追憶である。そのそつかりき追憶が、いみじくも心の琴線に触れる時、終身の血潮は異常に高鳴るのである。

それは、江南の天気緑に映ゆる頃であつた。

我に旧名の友は、青い鳥のさぼろーを追つて、老大国の北に彷徨ふたのであつた。そして、行雲野鶴、日暮れて路遠きいそつもの行路難に、痛々しい忍従の喘を吐けたのであつた。

かうした風餐露宿の大陸の漂泊と了へて、再び江南の地を踏んだ日は、夏もそつかり過ぎ、古思原頭には淋しい秋風の立つ頃であつた。

噫！夢は東西に走り、思ひは朔北辺降の地に飛ぶ。

苦難に苦難を積み、或は立ち或は躓き、爛れる称ふ夏の
烈日と戦ひ、埃に塗れ、泥濘に悩み、彷徨うた。みじめ
お姿——は我々老人の持つユラウドの憂の限りおき
醇化、清化、美化、深化の凄凜いさき現れであった。

斯くて、我々四名の男の手に依りて、究められた、黒龍江省
大黒河の旅、

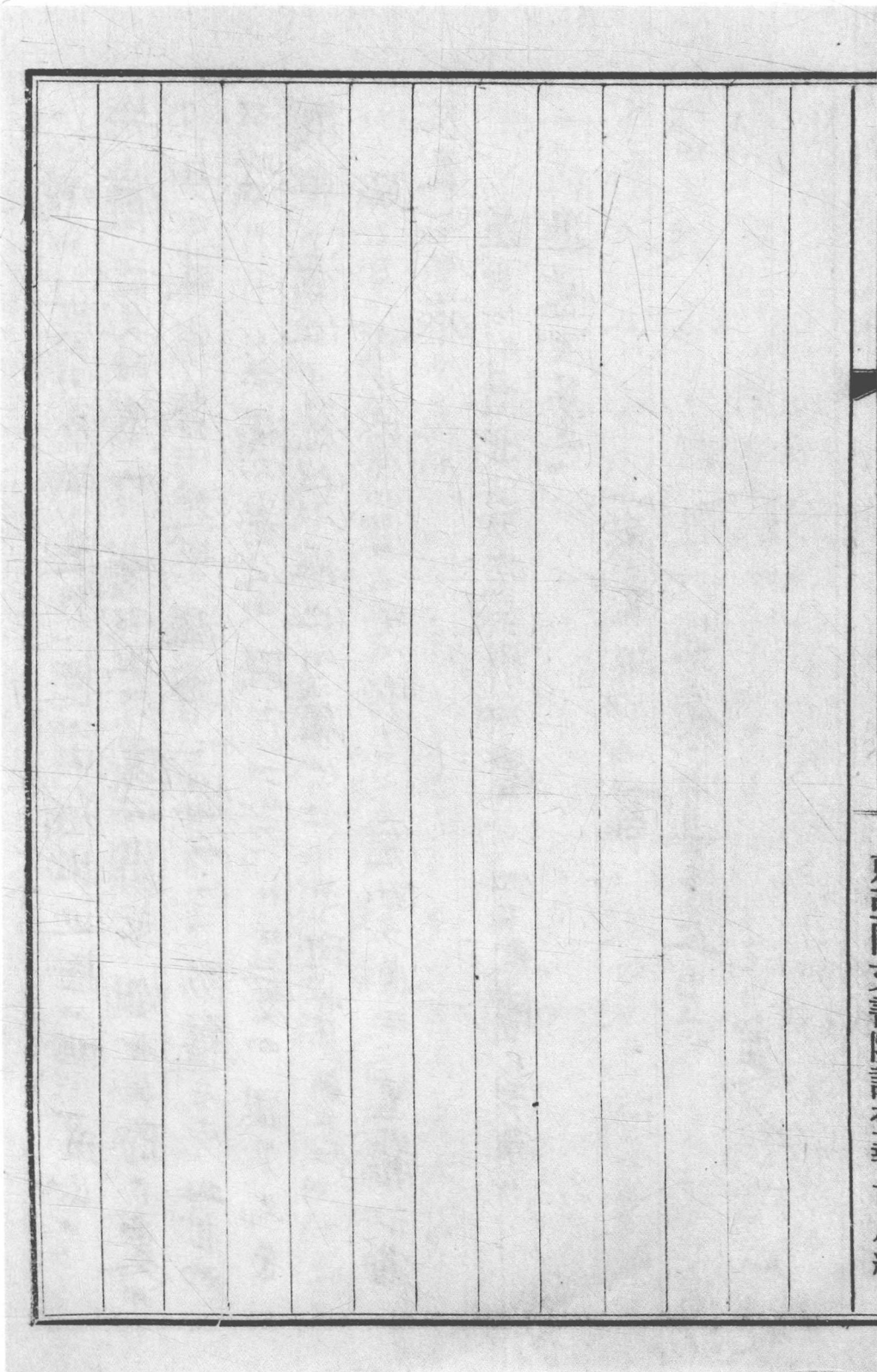
追憶にしまし、かわ、野や雲、はてが懐き旅の
追憶である。

一九三四年

一月

北寮十二号室にて

英久



第三卷
調查旅行日誌
五洲大書院
圖書印

第 三 期 生
木 本 保 英 人 記

昭和四年六月二日 癸 (上海)

“ 七月十日 解散 (奉天)

經過地

上海—青島—大連—奉天—長春—哈爾濱—
呼蘭—海倫—克山—嫩江(黑爾根)—瑯璦—

黑河。

フムール

黑河—日ムを左岸に見て、黑龍江を下り、更に

松花江を上航して、哈爾濱—長春—奉天

(解散)—大連—日本。

右、大体の全過地を示す。

記。

班員 四名、若宮二郎（奈良）

宮沢敏七（滋賀）

川瀬徳男（愛知）

小生

出發。

六月二日（旦晴）

毎年々々、送る居た自分か、今度は旅に送られる身とあつた。前途を想ふと感慨無量だ。

山東省西北斜線班と同船、新造船奉天丸の処女航海の賑かさ。日露支三ヶ國人相手に各々得意の語をもて談論風発。加えて誰かの空の附に依る「モラソー」の2壺は書院学生

をいふ益々當る可きあるの勢にふらめたる。音楽好の露西
亜人のかけた蓄音機も顔色無一だ。

船客よ、許してくれ。四年間の総決算の旅への革
首途だ。我々は若うだ。而も行先は雨か風か、
暗雲低迷する露支國境なりだ。板子一枚下の
船の中で魂躍る我々を微笑みで以て見てくれ。

六月二日（月） 晴

寝苦しくて悶々として眠を醒す。洋上の朝は
白むのが早い。船の旅は殆ど二年振りの自介は
格も帰省の時の称ふ気かりと爽々とも受える。

十二時、正午、主月島入港。港の威は非常に
好い。青い山々の間、赤い屋根、清い海水、春気
に煙を吐いてゐる汽船等、甲板から見ると主月島

は幾年前の戦争は夢にも思はれぬ。若先輩
新谷村本岡氏に、毎々の裡に案内して貰ふ。世紀
の破壊と想はせる所は、曇天露した砲台を廻る見事
なドライブロード、アカシア並木、上海の比では無い。別荘
地として有名なのは、もつともたと合点する。砲台下の白砂
の浜辺に腹這ひにあぐら見たい等と考へた。

青島に淡い名残をとびめて、五時お船も帆。青島
小学校生徒旅行団と迎へた。キャビンに賑かた。今
夜も亦、さびしく眠るのか？

六月四日（火） 晴

果して騒音と喊声に 曉の夢を破られた。天気は良好だ。
十二時大連に入港。埠頭の設備は好かつたが、我々には何
となく満鉄のマークが眼にちらちらして良し感を受けあつた。
予定通り海務協会に宿る、先輩、和田喜一郎、舟田捨雄
両氏に夕食の御馳立にふり、先づ旅の幸福の乾杯をする。
色々の先輩に会ひし注意を受けた。

大連で感いた事、一、万鉄万能、意味紛々、一、大連市
は動いた街だ、リライオンされおおい。一、先輩の多い所。

六月五日（水） 大連、 天気晴

旅に先黒龍江省最近の予備知識を得んと、ノート携え
満鉄本社に調査課を訪門、先輩高久氏何彼と便宜を
計り下さつたが、惜しい哉、最近の情報は本社にも解

居る。満鉄沿線の特務機関の方か却て良く解つて居るでせうと語られ先づ幻滅の悲哀を感じた。図書室の書棚も余りに古くて一顧の価値に無い。殊に余の調査課目の「牧畜」は黒龍江省では余り価値有るものでないらしく少々悲観した。か、兎も角、シ方迄同課で色々の本を漁り、概念だけは得た。

之食店、東洋一の海水浴場の称有る屋敷浦を道邊。日本海の荒浪々を見慣れた余には湖を偲はせる称が静かふ、画の称ふ此処の汀にしばし佇迷し、帰るを忘れた。思はず口から出る武骨な院歌にも何かしら詩的な或物を感いた。

同夜十時の汽車で、先輩諸氏に送られつゝ一路奉天へ。

六日(木) 晴 奉天。

支那人特有の無節制な混雑と大陸の朝の冷気は車中の睡眠を妨げらる。名に聞いた高梁もスナクと五寸程伸びて、秋の繁茂の称を想はせる。沿線の小站に立ち居る守備兵も我々には物珍らしい。此の一本の線路に沿った幾米突か以内か附屬地とか謂ふ相ふ。租界と同じものだらう等と思ふ。

朝九時奉天着。包圍攻撃手を受けた古市だと思ふと懐かしい。どうだこの塵は!! 建物といふ建物全部が黄色いホコリを被る。先輩安武氏の計画で(一応大丸旅館に入り、食后、余の知人、西田病院長を訪門し色々やもておしの上、更に盛京時報社訪問、予備知識を得、晩食を西田氏宅にし一同共に十一時辞去す。